
血の花

宮火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血の花

【Nコード】

N3996L

【作者名】

宮火

【あらすじ】

桜の木と、過去を繋ぐ世界のお話。

『桜の花は、木の下に埋まった人間の血で、赤く染まるんだよ。』

ずーっと昔、誰かに言われた言葉。

幼い私は、ちゃんと信じていたよ？

今でも……。

私は、ソファアに座って、大きな窓から外を眺めていた。

何を思うでもなく、時折、甘いコーヒーを口に運びながら、ただ、

眺めていた。

庭に咲いた、赤い桜を。

「よく飽きないな……」

少しだけ、呆れたような声を、背中で聞いた。

「こんなに綺麗なのよ？どうしたら飽きられるの？」

私はクスクス笑いながら聞いた。

「ずっとは流石に飽きるだろ……」

「貴方はそうでも、私は違う」

好きなんだから、と続けてから、甘いコーヒーを飲む。

そして、初めて声の主を振り向く。

とても綺麗な、格好いい少年。漆黒の髪の色も、珍しい紅い瞳も、整った顔も、どこか人間離れしているように見える。

実際、そうなのだけれども。

「？ 何だよ？」

じっと見られて気になったのだろう。

特に理由はなかったなので、断ろうとした時。
彼の首に、気が付く。

「槐^{カイ}、首、手当してあげる」

彼の首を伝う、紅い血を一瞥して言う。

槐は、とつさに血の流れる左の首筋を押さえた。

少しだけ、顔を赤らめながら。

私は、戸棚から救急箱を取り出して、既にソファーに座り込んだ槐の隣に座る。

クリスタルのテーブルに救急箱を置いて、カタカタと中を探る。

包帯、包帯・・・、あった。

見つけた包帯を手に取り、彼に向き直る。

紅い血が、流れている。

そして、彼の首に手を伸ばした時。

強い風と共に、桜の花びらが部屋を舞った。

「おお、綺麗だな」

其の光景を、槐は目を細めて見ている。

あれ・・・窓、開けたっけ？

桜の木がある庭を見る。

世界が、緋色に揺れた。

「切り離された世界、か・・・」
槐が呟く。

「木の下に、ナニカが在る」

瞳の紅がより深くなる。

彼はソファアールから立ち上がり、窓に近付く。

止まらない血が、軀を伝い床に落ちる。あまりの出血だ。

開けられたら窓に手を着いた彼は、外へ足を踏み出そうとした。

「……桜の花は、木の下に埋まった人間の血で、赤く染まるんだよ」

其の言葉は、私の口から。

「この木も、そうだよ」

振り向いた槐は、小首を傾げて、

「……誰か、知ってるのか？」

と、低い声で言った。

「……貴方の一番大切なモノ……」

「一番……?」

床が、血溜まりに濡れる。

止まらない血は、埋まったあの人と同じ。

貴方は、埋まったあの人の全て。

薔薇の意を持つあの人の名。

真名に、赤く咲き誇る此の花と同じ名を持つ貴方は、緋色の空を見上げている。

貴方は見えている?

世界から切り離された其の木の幹に、無限に絡み付く鎖に。

鎖に紛れて、幹に刻み込まれた背丈の傷に。

其の傷の傍の『朔良』と『箏日』の名に。

「包帯、巻いてくれ」

槐が、優しい笑顔で振り向いた。

私も、笑顔で頷いた。

何かの、甘い香りが風に流れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3996/>

血の花

2010年10月15日13時03分発行